勇者は負けたら
性転換3!!!

第1章

闘いは、ほんの少しの差で負けた。
ほんの少し。
本当にあと少しで・・・勝てるはずだったんだ。
でも負けた。

「魔王は女だった」
かつて勇者と呼ばれた男はそう呟きながら、目を覚ました。
勇者の横たわる棺の横には、仲間であった戦士、賢者の遺骸。
「ダメでした」
大聖堂の主、教皇は申し訳なさそうに勇者にそう告げた。
戦士は魔王の攻撃魔法をその身に引き受け、勇者の盾となって死んだ。
賢者は魔力の全てを使い果たし、命を魔力に変える自爆魔法で魔王に一矢報い・・・、
嘘は止めよう。
賢者の生命エネルギーの全てを持ってしても、魔王には何のダメージも与えられなかった。
二人の身体はバラバラに砕け散り、生き返らせようにも肉体が欠片しかない。
指の切り端だけでは、生命活動を維持できないのと同じように、身体の大部分が無ければ、大聖堂の教皇といえど蘇生は出来ない。
勇者はのどの奥に重いつっかえを感じながら、聞いた。
「姫騎士は？」
「・・・わかりません。帰還アイテムで御帰りになったのでしょうが、蘇生できるほどの身体を維持したままお戻りになったのは勇者様だけでございます」
「あ、ああ、あぁああああ！！！」
勇者の雄たけびが収まるまでの一昼夜。教皇は黙って、勇者の傍にいてくれた。

翌朝、勇者は頭にサークレットをはめた。
窓辺から差し込む朝日にサークレットの宝玉が光る。
宝玉は勇者の証明であり、勇者に値する人間の頭上にある時だけ光り輝く。
今光り輝くのは、勇者が勇気を湛えた人間であるという証明である。
それは、勇者が再び魔王討伐の旅に出ることを示していた。
魔王との決闘に関して、勇者自身の感覚としては、強く感じていることがある。
ほんの少し。あと少しで勝てるという実感を一瞬だけども得ることが出来た。
あの闘いで得た唯一の収穫がそれだ。
そして闘いの神「スギーヤマー」がこの世に落とした究極アイテムはどれも女性用であ

る。
魔王に勝つためのほんの少しを埋める鍵は、女性しか身に付けることの出来ない究極アイテムにあると思った。
そしてその全てのアイテムが、自分の手元にある。
ただ男である自分にはそれを身に着けることが出来ない。
ならば・・・女になれば良い。
幸い大聖堂の教皇は、その方法を教えてくれた。
ホリーイの魔窟最深部。
そこに性転換の泉があるらしい。
魔王と決闘するレベルにまで成長した勇者にとって、最深部まで降りることはさほど危険な道ではなかった。

「ありがとうね❤」
「・・・？
何を言ってるんだ！
今度こそ、今度こそお前を討つ！！！」
いまだ女の声の自分に慣れない。
だが魔王は目の前にいる。
そして装備は全て、女性しか身に付けることが出来ない究極アイテムのみ。
今回は仲間がいない。たった一人で挑む魔王戦。
だが、前回よりも勝つ確信があった。装備の強さ。魔王の強さを知っているという有利な状況。
必ず勝つ。
そう思いながら聖剣を魔王に突き立てる。
魔王はニッコリと微笑んでから手を掲げ…。
あっさりと、あっけなく・・・簡単に・・・決着はついた。
「この間よりも自信があったんだっけ？」
宙に浮かぶ勇者の女体。
金縛りの魔法なのだろうか。
勇者は動けないでいる。
呼吸自体できていないようにも見える。
「トーマクグツシューっていう闇の闘気を応用した技よ」
魔王はそう言うと、宙に浮いたままの勇者からひとつ、またひとつ究極アイテムをはがしてゆく。

聖剣はへし折られ、劫火の盾は砕かれた。
「もう挑む気さえしないように・・・ね❤」
そして天法の鎧も少しずつ外されてゆく。
あらわになる勇者の女体。
鎧を着るために身に着けたコルセット。
生まれたてのスライムのように乳房が揺れてしまう勇者を、魔王は子供を笑うよう顔で笑った。
「くっ・・・殺せ」
「あらやだ。思い上がらないで。
今の勇者ちゃんには、殺される自由なんてないのよ？
死ぬ自由も、生きる自由も無い。
私の思いひとつ。
ホントのことを言うとね・・・」
魔王はそう言いながら、天法の鎧を砂塵に帰してゆく。
「勇者ちゃんだけは生き返れるように、五体無事なまま殺したの。
もっと言うと、前回は勇者ちゃんだけには『もう少しで勝てるかも』って思ってもらえるように戦ったのよ？
そうすればあなたはきっと、私の元に戻ってくる。
きっと究極アイテムを身に着けて。
女になって・・・❤
人間なんか少しも怖くないけど、このアイテムだけは怖かったわ。
だからずっと壊したかった。
でも魔王である私は、この身体である限りこの城の外に出られない。
じゃあどうするべきだと思う？」
勇者は瞳孔を見開いて、自分が何をしたのか理解した。
何をしてしまったのか、理解した。
自分が魔王の手のひらの上で踊っていることを、ようやく理解した。
「あはっ。
勇者ちゃんに運んでもらいたかったの。
究極アイテム。
だから、言ったでしょう？
ありがとう❤」

魔王はそう言うと、勇者のパンティーを引きちぎり、下半身を露出させた。
そして闇の闘気を使い、オシッコし～し～のポーズで勇者を空中に固定し、自らのビキニアーマーの下半身部分だけを装備解除する。

そこから現れたモノを見て、勇者はギクリとした。
肉が唸りながら、隆起してゆき、先が赤黒く膨れてゆく。
「まっ・・・まさかそれは・・・」
チラつく魔王のチ●ポ。
魔王が手を掲げると、闇の闘気が勇者の身体にねっとりと絡みつく。
自分では絶対に振りほどくことは出来ない。
そう確信せざるを得ない圧倒的な闇の闘気。
その闇の闘気の出処は魔王のチ●ポだった。
「勇者ちゃんにはご褒美をあげないとね。
私の恐怖を取り除く御手伝いをしてくれたんだし・・・❤
女の子になったばかりだから、欲しいのはコレでしょう？
いつまでも処女じゃ恥ずかしいものね？
せっかく女になったんだから、メチャクチャになるまで犯されてみたいよね？
あんな無粋なパンツ履いてるようじゃ・・・未体験でしょう？
お嬢ちゃん❤」
勇者は自身が履いていたパンツが、いかにも田舎臭い事、機能性以外何も考えずに購入したこと、そしてそれ故に処女であることがバレバレだと指摘され、一瞬で顔が真っ赤に染まった。

「サイズは、魔界最大のチ●ポを持つデビルオーク❤
精力の強さは、ギガントホース❤
精液の濃さは、ポイズントロル❤
そして形は、勇者ちゃんがこの間まで股間にぶら下げていたおチ●ポそのまんま（笑）。
クスクス、知ってるでしょう？
デビルオークはメスのマ●コが深いから、オスのチ●ポも自然と長く、太くなるのよ。
ギガントホースは7日間、走りながらセックスし続け、そのまま死に絶える。
走り続けていないと鞭が飛ぶからね。
まぁ私がそうなるように、進化させたんだけど。
ポイズントロルは、ここ魔界で最も数の多いモンスター。
数が多いのは自身の肉体が持つ毒に負けないよう、濃くて生命力にあふれた精液を射精出来るから❤
でもこれは魔王としては、ほんの遊び心。
一番大事なのは私のおチ●ポが、男だった頃の貴女のおチ●ポの形そのまんまだってこと。
……大きさ以外は、……ね（笑）。
男だった頃の自分のチ●ポで犯されるのなら、『お嬢ちゃん』も嬉しいでしょう？

しかも、犯してくれる相手は男性を捨ててまで挑み、完膚なきまでに負けた相手であるこの魔王。
悔しいよねぇ？
嬉しいよねぇ？
たまらないよねぇ？
どうしたの？
顔が引きつってるよ？
初めてはレイプが良いよね？
無理矢理犯されて、グッチャグチャにされるのが良いよねぇ？」

勇者は顔を横に振ろうと試みたが、闇の闘気でそれは阻まれ、逆に顔を縦に振らされてしまう。
その様は、まるで子供が「お菓子欲しい？」と目の前に駄菓子を差し出され、思わず顔を縦に振ってしまった時のそれと全く同じに見える。

「あ～❤
そっか～❤
レイプされたかったんだぁ！
じゃあ当然、前戯は……無しっ！
いきなり挿入だよ？
覚悟はおーけい？
マ●コが膨れ上がって、血が噴き出る覚悟は？
憎っくき宿敵の前で、痛くて泣いちゃう覚悟は？
魔王様に、女にしてもらったことを感謝する準備は？
ああ、そ・れ・か・らぁ・・・❤
少～しだけ、女の子らしくしよっか？
ほら、剣を持つ手の小指をちょっと上げて。
クスクス、そうそう。
足は内股に❤
女の子らしくなってきたよ（笑）
それからぁ…レイプなんだから、おっぱいは片方だけ出しておかないとね？
あ❤
おっぱいの穴、開けよっかぁ…❤」
魔王は白く細い指先で勇者の胸を包んでいた布のシャツを摘むと、あえて闇の闘気も、魔力も、アイテムも使わずに、腕の力だけで布の限界耐久値を超えるまで、ゆっくりと、されど無遠慮に引っ張り、そして勇者の右側のおっぱいだけを露出させた。

さらに、勇者のシャツの上から一杯の水をかけ、シャツの下に隠れたままだった左のおっぱいも透けて見えるようにする。
「こうしておけば、いつ乳首が勃っても問題ないよね。
しっかりバレちゃって、嘲笑されたいものね？
ね？
お嬢ちゃん・・・❤」

魔王はそう言いながら、勇者の真後ろに周り、勇者の足を掴んだ。
そしてその瞬間が訪れる。
「あぎぃいいっ！　ぬぐっ！　ぐはっ！」
亀頭が、指さえも受け入れたことのないマ●コの奥深くまで一気に挿し込まれ、（勇者は気づいていなかったが、この時点で挿入されたのは亀頭の部分だけだった）マ●コを中から押し広げてゆく。
そして体ごと上に持っていかれる。
コレは、魔王のチ●ポの硬さ・大きさを否応がなく勇者に実感させた。
「ぬっ……抜いてぇえええっ！」
「え～？
もう？
どうしよっかな～～～❤」
「あ…ぐっ……お、お…お…おぉ」
「しょうがないお嬢ちゃんだこと。
じゃあ…、抜くよ」
勇者はほっとしたという感情と、速く抜いてくれという感情で頭がいっぱいだった。
脳が、身体が、痛みを魂に届くまで叫び、訴えている。
「やっぱ、や～めた」
もうあと少し、あとほんの少しで抜けきるというところで魔王はチ●ポを抜くのをやめた。
そして腰を激しく、まっすぐに勇者の膣に向かって打ち付ける。
「あぎゃっ！」
「ふんっ！」
「あぎゃっ！」
「ふんっ！」
「ぎゃっ！」
「ふんっ！」
「ぐゃっ！」

連続でストロークされて、マ●コの内側の肉壁が擦れて血が滲む。
されど、この地獄が止む気配は無し。
しかしこの時、勇者はとある感覚に襲われていた。
『チ●ポをシコシコしたい。
射精したい』
という感覚だ。
不思議な感覚だった。
男を捨てたはずなのに…、よりにもよって最も憎むべき相手に犯されているというのに…、なぜか射精願望が湧き上がってくる。
チ●ポをメチャクチャにしごき倒して、射精したいのだ。
しかしそれは、もはや叶わぬ夢。
女である以上、もはや自分のチ●ポは無い。
しかし、どうしても…。
どうしてもしごきたくて、堪らない。
今すぐに！

「おやおや？
すっかり目が垂れてきちゃって❤
チ●ポ挿れてもらったら、イきたくてたまらなくなったでしょ？
でもまだ心がオスのままだから、おチ●ポ扱くたくなっちゃう（笑）。
これで勇者ちゃんも自分の本性が分かったね❤
勇者ちゃんは肉欲には逆らえない貧弱で、無様な、ただの人間。
貴女はもう、私には逆らえないの。
だって、私にはチ●ポがあるから❤
そのうち、
『もう昔みたいに扱けなくても良いから、
おチ●ポぶっ挿して欲しい』
って思うようになるわ。
今貴女が感じてるその切ない感じだけで良いから、欲しくて堪らなくなるのよ。
それが女の快感だから❤
貴女を満足させることの出来るチ●ポ様には、絶対に抗えない。
じゃあ、チ●ポ様の主である魔王には？
もちろん……絶対服従❤」
「そ…そんなことに…あぁっ！
な……なるわけ……ひぐぅっ！
あっ❤あっ❤あぁあっ❤

あひっ！
おチ●ポっ！
あぁあああああああ！！！！！」

こうして勇者は魔王のチ●ポを受け入れたまま、女として初めて絶頂を迎えた。
しかし魔王は、その腰の動きを止めたりはしない。

「当然、魔王の私が満足するまでこの腰は止まらないわ！」
「あひっ❤
ふぁぐっ❤
ふひっ❤
あっ❤」
「私が射精するまで、貴女はイこうがイくまいが、犯され続けるしか無いの。
ただただマ●コを嫐られる。
それは我慢するしか無いのよ。
なんでか分かる？」
「ふひっ！
あ❤
ふぉぎゅぅっ！
ああ！
あんっ❤」
「答えは簡単。
貴女が敗者で、女で、チ●ポが大好きだから。
そして私以上の、チ●ポを持つ者はいない。
勝者で、チ●ポの主で、絶対支配者。
これからは私のキツ〜〜い支配そのものが、悦びになるの❤」
「あ……あぁん❤
ふひっ！
ふぁふっ❤」
「理解できたのなら…」
魔王は腰を止めて、勇者の口から垂れる唾液を指で掬う。
そして、勇者の耳元で囁いた。
「もう一度だけ、イかせてあげる。
私の精液をその膣で満たして……ね❤」

勇者は両目をつぶって、沈黙した。
口が自由に動くよう闇の闘気が一部解除されたので、言葉で意志を示すことが出来たはずだが、そうはしなかった。
ただ、沈黙を貫いた。
それは今の勇者に出来る精一杯の、抵抗の表明である。
だが魔王は、勇者の意図するもの全てを飲み込んで、腰を打ち付けた。
そして、亀頭の先端で勇者の弱点を探る。

膣の入り口…。
膣壁…。
子宮…。
子宮内膜…。
子宮の底…。
「知ってる？
女性のマ●コは十人十色。
膣は、洋梨を逆さにしたような構造になってるけど、その深さは凄く深い人もいれば、浅い人もいる。
曲がった膣、まっすぐな膣。
膣壁がツルツルの人もいれば、ザラザラもいる。
勇者ちゃんは、膣壁全体がプニュプニュした柔らかいヒダで覆われてる❤
しかも、膣が深くて、まっすぐ❤
これは鍛え抜けば、名器と呼ばれるマ●コになるわね。
勇者ちゃんの人柄を現しているのかな？
クスクス」
「ふぎゅっ❤」
「あぁ、ここね。
勇者ちゃんの弱点は…。
この洋梨のお尻の部分。
子宮への入口手前の左部分が、性的な興奮ポイントなのね？
あはっ❤
ど～う？
マ●コを開発される気分は？
最高でしょう？
じゃ、弱点をしっかり責めてあげるわね❤」
「ふっ！」
「あ❤」
「ふっ！」
「あふっ！」
「ふっ！」
「ぬひっ❤」

こうして勇者は、魔王が射精するまで延々と…。
文字通り三日三晩犯され続けた。

勇者の体力がゼロになり、意識が飛ぶと、すぐに回復魔法。
勇者の精神力が砕け散り発狂すると、特殊なアイテムを使って時間を戻され、発狂する前の状態に…。

三日三晩犯され続けてようやく、勇者は膣の中に、闇の闘気が混ざった白濁の精液を注入された。
あまりの匂いの酷さに勇者が気を失うと、魔王は声を上げて笑った。
そして地下牢に勇者を放り込み、幾重にも逃亡防止用の魔法陣を敷き詰めてから、その場を去った。

少ししてから地下牢に響く。
「……まさか貴女は……、勇者様…っ！？」
地下牢には、先客がいたのだ。